

時間意識の無限後退

——『ベルナウ草稿』における予持の二重の充実について——

宮田 勇生
(東北大学)

1 はじめに

本論では、予持の充実というプロセスに注目して1917/18年の『ベルナウ草稿』の時間論が持つ特徴を明らかにする。『ベルナウ草稿』に代表されるフッサールの中期時間論を『内的時間意識の現象学』(以下『時間講義』)で展開された初期時間論と比較するとき、際立った相違の一つは予持の強調である。過去についての意識である把持と現在についての意識である原印象の分析に力点が置かれた初期時間論とは異なり、『ベルナウ草稿』では未来についての意識である予持が中心的な問題となる。それに伴い、原印象は単独の意識というよりも、かつて予持されていたものが出現して予持が充実される一連のプロセスと捉えられるようになる。こうしたことが、初期から中期時間論にかけてのフッサールの見解に生じた重要な変化である。

ここで原印象が予持の充実と表現されるとき、それは『論理学研究』(以下『論研』)で詳細に論じられた充実の構造を想起させる。だが、空虚な志向と直観的な志向という二つの作用が、それらを総合する第三の認識作用によって結合されて充実が生じるとした『論研』とは異なり、『ベルナウ草稿』のフッサールは、そのような第三の契機を必要としない充実化を考えている。本論の目的はその理由を明らかにすることである。

なぜフッサールは『ベルナウ草稿』において『論研』とは異なる充実のモデルを提示したのか。それを明らかにするために手掛かりとするのは時間意識の無限後退の問題である。だがそれは、初期時間論においてすでに見出されていた意識流の自己構成をめぐる後退ではない。この後退に加えて、『ベルナウ草稿』のフッサールは「顕

在的無限の後退」という新たな後退を見出す。本論では最終的に、この新たな無限の内実を明らかにするとともに、フッサールが新たな充実モデルを提示した理由をこの問題との関わりにおいて考察する。

2 『ベルナウ草稿』の時間論

フッサールは『時間講義』において、メロディのような持続する対象の知覚を説明するために、「原印象」ならびに「把持」と「予持」という働きを導入した。たとえば、ドレミというよく知られたメロディを聞くとき、それが連続したメロディとなるためには、それぞれの音が別個に聞かれてはならず、また和音のように同時に聞かれてもならない。メロディを聞くために、私たちはいま鳴っている音を聞くとともに、過ぎ去った音は過ぎ去った音として、また到来する音は到来する音として意識していなければならないのである。つまり、レが鳴っているときには、ドは「もう鳴り止んだ音」として、ミは「これから鳴るであろう音」として意識されている。このそれぞれに、「原印象 *Urimpression*」、「把持 *Retention*」、「予持 *Protention*」が対応する。したがってフッサールによれば、私たちの知覚は点的な現在としての原印象に限定されず、その前後を包括する「時間の暈 *Zeithof*」(X, 35)¹に囲まれているのである。

すでに述べたように、『時間講義』の中心は原印象と把持の分析であり、時間意識は主に現在と過去の関係として捉えられている。しかしながら、『ベルナウ草稿』では予持が中心的な主題となる。こうしてフッサールは意識のより包括的な構造を視野に収めることが可能となったのだが、そこで決定的なのが Nr.1 で論じられた予持が現在において充実されるという見解である。

『ベルナウ草稿』における予持の問題を考えるときにきわめて重要なことは、現在についてのフッサールの捉え方の変化である。『時間講義』では(点的な)現在の意識が原印象と呼ばれ、それが把持の「源泉」(X, 67)であるとみなされていた。つまり、現在のものが過去へと流れ去るという連続的な推移が存在するとはいえ、現在は流れ去るものがそこから発する特別な始点と考えられていたのである。しかし『ベルナウ草稿』において、原印象は把持と予持の「限界／境界点 *Grenzpunkt*」(XXXIII, 4)とみなされ、把持と予持に依存することでしか存在しえないものとなる。こうして積

1. 以下フッサール全集からの引用では巻号と頁数のみを併記し、それぞれローマ数字とアラビア数字で表記する。またフッサールからの引用に限らず、文中の[]は引用者の補足、(…)は引用文の省略を表す。

極的な性格づけを失った原印象は、とりわけ予持の充実として規定されることになる (XXXIII, 7)。つまり、把持—原印象—予持という構造は、予持が充実されて把持になっていく一連のプロセスとして考えられるようになるのである。フッサールはこうした事情を踏まえ、「原印象」に代えて「原現前化 *Urpräsentation*」 (XXXIII, 3) という語を導入する。それが意味するのは、現在が、空虚な予持が充実されてふたたび空虚な把持へと沈んでく、不断の充実化と脱充実化 (空虚化) からなる動的なプロセスであるということだ (XXXIII, 30; cf. 村田 2017, 204)。

予持への注目とは、『時間講義』の第三章で明らかにされた二重の把持という構造を拡張する。そこでフッサールは、諸々の時間的な客観の根底にある「絶対的に時間構成する意識流」 (X, 73) という次元に目を向ける。つまり、メロディのような持続する対象は把持—原印象—予持という構造を備えた知覚によって構成されるのだが、この知覚 (ならびにそこに含まれる現出の連続) もまた時間的に持続しているため、それ自体が根源的な意識流によって構成されるのである。だが、この意識流も流れであるからには構成されている必要があるが、そのために別の意識流を想定すると無限後退が生じ、最終的に時間はどのように構成されるのかという点が解明されずに終わってしまう。ここで導入されるのが二重の把持という構造である。

フッサールは、絶対的な意識流がそれ自体を流れとして構成するという構造を提示する。彼によれば、把持には二重の方向性があり、音のような客観に向かいながら音についての意識それ自体にも向かっているのである (X, 80)。それによって、流れるメロディのような客観が捉えられるのと類比的に、意識流それ自体が捉えられる。だが、『時間講義』のフッサールは原印象を把持の源泉と捉えていたのだから、このような意識それ自体へ向かう把持にもその源泉としての原印象が想定される。フッサールはそれを「原意識 *Urbewusstsein*」と呼ぶ (X, 118ff.)。したがって、意識それ自体へ向かう第二の方向にも把持—原意識という構造があり、把持—原印象という構造によって時間的に過ぎ去る対象が構成されるように、意識流それ自体が構成されるのである。

このような把持の二重性を受けて、『ベルナウ草稿』では予持の二重性が論じられる。つまり、予持は客観へ向かうと同時に意識それ自体にも向かっているのである。それに伴い、原意識は原印象と同じく予持が充実するプロセスであると捉えられ、原現前化は予持の二重の充実という構造を備えたものであることが明らかになる。すなわち、予持は次の瞬間に生じる対象だけでなくその対象についての意識にも向かっているため、原現前化とは対象と意識それ自体が同時に充実化するプロセスなのである (XXXIII, 29f.)。とりわけ、フッサールは前者を「特殊充実 *besondere Erfüllung*」

(XXXIII, 30)、後者を「一般充実 *allgemeine Erfüllung*」(XXXIII, 29) と呼ぶ。

また、把持と予持の二重性を組み合わせることで、予持の把持や把持の予持といった間接的な構造が見出されるようになる。そのつどの意識がそれ自体に対する把持と予持であるとすれば、つねに以前の把持と予持をともに把持し、また以後の把持と予持をともに予持しているのである。フッサールはこのような構造を「把持と予持の相互内属 *Ineinander*」(XXXIII, 11) と呼ぶ。この構造によって明らかになるのは、一般充実としての原現前化が持つ二面性である。つまり、原現前化は「一方ではそれ自体で以前の意識〔予持〕の充実として性格づけられ、また他方ではそれ自体で以前の意識〔予持〕の把持として性格づけられる」のである (XXXIII, 25)。原現前化において現在の意識についての以前の予持が充実されることは、その以前の予持の把持によって、当の現在の意識が以前には予持されていたことを把持することと不可分なのである。

だが事情はさらに複雑である。なぜなら、把持と予持によって捉えられた意識もまた把持と予持の二重性を有しているのだから、さらに過去や未来の意識を捉えており、それは無限に拡張されうるからである。予持は意識流の以降の区間のすべてに関係し、把持もまた意識流の以前の区間のすべてに関係するのである (XXXIII, 29)。たとえば、予持は直後の意識だけを予持しているのではなく、その意識を介してその次の意識を予持し、さらに次の意識、等々を予持しているため、予持は無限の未来の意識をも意識することになるのである。同じ構造が把持にも当てはまる。

以上が本論に関わる限りでの『ベルナウ草稿』における時間論の基本構造である。これを踏まえて、以下の第3節では『論研』における充実と『ベルナウ草稿』における充実の相違を確認する。

3 充実についての二つの理論

まず『論研』における充実を簡潔に確認したい。『論研』第一研究において、フッサールは志向性を語や命題の意味に向かう「意味志向 *Bedeutungsintention*」という性格に基づいて分析する。その際に重要なのは、実際に対象や事態が直観的に与えられずとも、私たちはその意味を理解できるということである。それゆえ、志向には対象が与えられていないものと、対象が実際に与えられているものが存在する。フッサールがそれぞれの志向を「(空虚な) 意味志向」と「意味充実 (作用)」と呼び (XIX/1,

44f.)²、あるいは第六研究においては「表意作用」と「直観作用」という呼称を用いている (XIX/2, 599)。またフッサールは、意味志向には「直観へ向かう傾向」(XIX/2, 600) があるとし、あらゆる意味志向には「達成」ないし「充実」としての別の作用が対応する (XIX/1, 393) ということを認めている。すなわち、空虚な意味志向はそのままの状態にとどまるのではなく、対象を直観的に与える別の作用による充実を目指しているのである。

だが、『論研』において空虚な意味志向（表意作用）と意味充実作用（直観作用）は二つの数的に異なる作用であり、前者が後者へと連続的に変化するとは考えられていない。そのためにフッサールは二つの作用の同一化という概念を導入する。表意作用と直観作用は、それぞれが同じ対象を志向している³という点に基づいて合致し、充実されるのである。重要なのは、この同一化には二つの作用を綜合する第三の作用が要請されるということだ。フッサールによれば、それが「認識作用」である。

一定の端的な仕方、一方の表現体験 [= 表意作用] を他方の該当する知覚 [= 直観作用] と融合させる認識作用 [Erkennen] が、〈この事物を私のインク壺として認識する〉という体験を構成する。(XIX/2, 560)

したがって、空虚に志向されていた「インク壺」が実際の知覚によって充実される——「これがインク壺だ」という判断が生じる——ためには、二つの作用を融合させる第三の認識作用が必要なのである。それゆえ、『論研』における充実、表意作用と直観作用が認識作用によって綜合されるプロセスとして捉えられている。

しかしながら、『ベルナウ草稿』にはこのような『論研』のモデルとは異なる充実の構造を見出すことができる。フッサールは予持が充実するプロセスとしての原現前化を導入する際、以下のように述べている。

2. 以下『論研』からの引用はすべて第一版による。

3. 紙幅の都合上、ここでは簡潔に「同じ対象を志向している」という言い方をしたが、実際の議論はやや複雑である。『論研』のフッサールは作用の外部にある超越的な対象を考察から除外するため、「～についての」という志向的な性格は作用に内在するものとみなされる (XIX/1, 427)。そこで導入されるのが作用の「質料 *Materie*」という概念である。質料とは、作用がどんな対象を志向し、それをどのように志向するのかを決定する働きを担う (XIX/1, 429)。それゆえ、充実において表意作用と直観作用が合致すると言われるとき、これらの作用は質料の一致という点で統一される。

[1] (…) 原現前化とは (…) 原現前⁴が不断に出現するというだけでなく、原現前が予期志向の充実として不断に出現することなのである。(…) [2] それ〔充実 Fülle〕は、二つの調和する志向的体験の合致ではない。[3] たしかに、流れにおける継起を考察するうえでは、最初に空虚な予期があり、つぎに (…) 原知覚の点があると言うこともできよう。[4] だが、充実する内容である原現前が先行する空虚な志向へと入り込み、それによって空虚な志向が原現前化する知覚に変化することで初めて、この体験〔原知覚〕が流れのなかで生じるのである。(XXXIII, 4f.)

ここではまず、原現前化とは単に新たな現在が現れることではなく、以前の予持 (予期)⁵の充実としての新たな現在が生じることであると述べられている [1]。だがこの充実は、『論研』のように二つの志向の合致とは捉えられていない [2]。たしかに、便宜上は最初に予持があつてつぎに知覚があるというように、二つの作用を別個に考えてみることはできる [3]。しかしその二つの間には、充実が生じることで知覚が生じるという内在的な関係が成立しており、互いに独立して存在する二つの志向として考えることはできないのだ [4]。したがって、『ベルナウ草稿』の充実は、一つの作用が連続的に空虚なものから充実されたものへと変化するプロセスとして捉えられることになる。

こうして『論研』と『ベルナウ草稿』における充実の相違が明らかとなった。前者では、空虚な志向と直観的な志向という二つの異なる作用が、認識作用という第三の作用によって総合されることで充実が生じるとされていたが、後者ではそのような第三の作用は要求されないのである。ただし、注意せねばならないのは、『論研』では単なる知覚を超えて「A は B である」のような認識が生じる場面が問題とされているのに対し、『ベルナウ草稿』ではむしろ単純な知覚が論じられている点である。そのため、両テキストにおける充実を完全に重なる概念と見なすことはできないが、空虚な志向と直観的な志向の関係という同一の主題について、異なるモデルが提出されていることも事実である。それゆえ、『論研』では十分に論じられなかった知覚

4. 原語は「Urpräsenz」であり、原現前化が現在となるプロセスを表しているのに対して、現在において与えられる内容を表していると思われる。

5. 通常、フッサールの時間論において予持は (把持とともに) 時間的な幅のある知覚を構成する要素であるとみなされ、それに対して予期は (想起のように) まだ起こっていない未来の出来事を準現前化的に思い浮かべる働きとみなされている。それゆえ、本来は予持と予期は区別されるべき概念であるが、ここでフッサールは予期を予持と同じ意味で用いている。

と時間の関係を考察するうえで⁶、フッサールが新たなモデルを提示するに至ったと考えることは十分に可能である。以下では、このような差異がいかんにして要請されるのかという点を明らかにしたい。

4 意識の無限後退

充実に対するフッサールの変化の理由として、N. DeRoo は無限後退の問題を挙げている。彼は、新たな充実モデルの導入によって「もはや充実を「外部から external」総合する意識に訴える必要がなくなった」ことで、フッサールは「無限後退の問題を回避することが可能となった」と述べている (DeRoo 2010, 107)。この指摘を手がかりに、本節では『ベルナウ草稿』における無限後退に関する議論を明らかにしたい。

注目すべきは、『時間講義』において見出された絶対的意識流をめぐる無限後退とは別の無限にまつわる問題である。R. Bernet と T. Kortooms が指摘するように、フッサールは『ベルナウ草稿』において二つの無限を問題にしている。(Bernet 2010, 9ff.; Kortooms 2002, ch.4)。第一の無限後退はすでに触れた意識流の自己構成をめぐる無限後退であり、それは「基礎の後退 regress of foundation」(Kortooms 2002, 170) と呼ばれる。第一の無限の問題は、絶対的な意識を構成する別の次元が無限に想定されてしまうことであった。それに対して、第二の無限は一つの意識の次元で生じるものとされる。まずはその内実を明らかにしたい。

Kortooms によれば、第二の無限はフッサールが Nr.2 の脚注で用いる「顕在的無限 *aktuale Unendlichkeit*」という表現によって特徴づけられる(Kortooms 2002, 170)。すでに第2節で取り上げた相互内属に基づく予持と把持の無限の広がり論じた箇所、フッサールは以下の注を付している。

差異を含んだ [differenziert] 諸瞬間と、可能な再想起の単なる潜在性である無限の地平とが区別されねばならない。そうでなければ、私たちはすべての Uk [意識流のそのつどの瞬間] において諸瞬間の顕在的無限を持つことになってしまうだろう。(XXXIII, 28)

6. 事実、フッサールは第六研究の中で「志向は予期ではなく、未来に現れることに向けられていることは、志向にとって本質的ではない」(XIX/2, 573) と述べ、志向性と時間の関係を立ち入って論じてはいない。

すでに確認したように、フッサールは予持と把持がそれぞれ、意識の未来と過去のすべてに関わることを認めていた。ここで「顕在的無限」という言葉で問題にされているのは、まさに任意の瞬間において、把持と予持の二重性を介して無限の過去と未来が実際に意識されてしまうことだ。すなわち、意識が無限に遠くの過去と未来へと延長されてしまうのである。これが第二の無限後退（あるいは無限延長）である⁷。それを回避するためにフッサールは、過去と未来のうちで差異を含んで意識された部分と、再想起によって準現前化される可能性を秘めた部分を区別する。つまりここでは、予持と把持によってはっきりと意識できる範囲には限界があることが示唆されている。この事情がさらに詳しく論じられるのは、Nr.2 の第 8 節と Nr.11 の第 8 節以下である。

Nr.2 第 8 節において、フッサールは全知の神的な意識と有限な意識の差異を論じる。問題は、把持と予持に関するこれまでの議論からは、現在の意識がその過去と未来のすべてを実際に意識していることを原理的に否定することはできないということだ。それゆえ、全知の自己意識を有する神のごとき意識の可能性が浮上する。だがそれには以下の留保が付されねばならない。

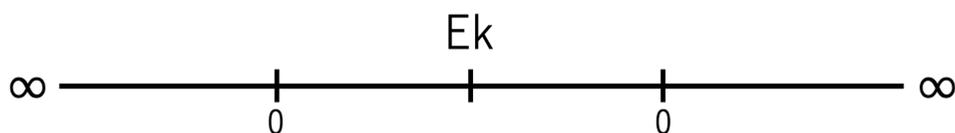
(…) だがそれは、〔1〕意識流の過去と未来が溶け合い、意識の自己知覚の完全性を制限する闇の地平が偶然な境界であって、〔2〕「理念」としては完全な明晰性においてそれ自体を包括する全知の「神的な göttlich」意識が生じてくるところまで、この境界を無限に拡張して考えてみるができるということ を考慮に入れる限りにおいて可能であるにすぎない。〔3〕「有限な endlich」意識もまた全知であって、その志向性は過去と未来の全体を包括しているが、明晰なのは部分的であり、他の部分は明晰性と想起への潜在性である闇に包まれているのである。(XXXIII, 45f.)

ここでフッサールは、全知の意識はある想定のもとで登場する理念的な可能性にすぎないことを強調している。つまり、把持と予持が明晰に意識することのできる範囲

7. ここで「無限後退」と呼んだ事態は、意識が無限の過去と未来へと広がってしまうことであるため、「無限延長」と呼ぶ方が適当かもしれない。しかし、ある時点についての意識にはさらなる時点への把持や予持が含意されるために、把持と予持が無限に想定されて無限の時点を意識することになるという側面を考えれば、意識の「無限後退」という言葉が完全に不適切であるというわけではないだろう。したがって、以下では「後退」と「延長」という二つの語を適宜使い分ける。

が偶然に決定されたものにすぎないため〔1〕、理念的にはその範囲を無限に拡張することができる〔2〕という想定である。だが、有限な意識である私たちの意識には明晰性の限界があり、その先は想起（準現前化）を通してしか明晰に意識することのできない闇に包まれているのである〔3〕。明らかにここでは先に触れた顕在的無限が問題になっている。すなわち、全知の意識とは諸瞬間の顕在的無限を有している意識であって、フッサールはそれを理念的な極限とみなしている。それに対して、私たちの有限な意識には明晰性の限界があり、実際に意識が無限の過去と未来へと延長してはいないのである⁸。

こうした意識の限界を表現するために、フッサールは Nr.11 第9節において以下のようなシンプルな図を提示している。



(XXXIII, 227)⁹

E_k は意識されている出来事の現在の点を表している。フッサールはまず直観性と非直観性という二つの範囲を区別し、その境界が0にあると述べる (XXXIII, 227)。つまり、図の0は直観的に意識される限界を示している (cf. Kortooms 2002, 171)。フッサールは直観性と明晰性を重ね合わせるが、この図は直観性が0になった点で終わるわけではない。直観性の0を超えても ∞ へと向かう区間があり、それはさらに差異化されて意識された部分とそうではない部分に区別される。とくに把持の側面について、フッサールは「過去性の地平の点 ∞ は意識される最後の出来事点ではなく、その先は「直観的でない *unanschaulich* だけでなく、差異を含んでもいない

8. だが、有限な意識は実際に無限の過去と未来を意識していないという想定には、どんな根拠があるのだろうか。その理由の一つとして、ベルネは『ベルナウ草稿』のフッサールにとって、そのような予持と把持の無限のプロセスが「本当に現象学的に確証された発見を表しているのか」(Bernet 2010, 10) という点が疑わしいものになったのだと述べている。たとえばこのような『ベルナウ草稿』の見解と軌を一にするように、発生的な問題が論じられる『受動的総合の分析』では、明確な区別を失った過去の出来事がいかにして現在の自我を触発しうるかといった問題が扱われている (XI, §§32-39)。このような背景を踏まえてベルネは、時間意識の問題が発生的な枠組みに移るにつれて、フッサールが無限に遠い過去についての把持という現象を見出すことができなくなったことを示唆している。

9. この図はフッサールが該当箇所ですす図を引用者が再現したものである。

undifferenziert 地平」であると述べている (XXXIII, 228)¹⁰。図の直線は ∞ で終わっているが、それは意識の届く範囲の限界ではなく差異化されて意識される範囲の終点を表しているのである。したがって、実際に意識される区間には一定の限界があり、その先は顕在的な仕方では意識されない。このような限界を設定することで、フッサールは顕在的無限の問題を回避したのである。したがって、把持と予持の二重性から帰結する無限後退は、顕在的無限に対処することで解消される。

5 もう一つの無限後退？

しかしながら、『ベルナウ草稿』において『論研』の充実モデルが採用されない理由はいまだ明らかではない。把持と予持の相互内属から生じる無限後退の問題に立ち戻ろう。すでに述べたように、予持の予持や把持の把持から生じる無限は、差異化の限界を画定することで解消された。しかし、予持の把持や把持の予持についてはどうだろうか。私たちが直後の意識を予持しているとき、予持された意識は直後の現在においてその予持を把持することになる。だとすれば、予持は次の瞬間にそれ自身が把持されることをも予持しており、それは予持の把持の予持という形態になる。だが、最初の予持と予持の把持の予持がともに直後の意識を予持していることになり、そのため、現在において充実されるのは予持だけでなく、予持の把持の予持でもあるということになり、同様に充実される予持が無限に増殖してしまうだろう。つまり、把持と予持の相互内属という構造により、ある時点へ向かう予持(ないし把持)の経路が無限に存在してしまうのである。ここではその問題を「経路の無限後退」と呼ぶ。この無限はどのように処理されるだろうか。

まず、この無限は直後の現在についても無限の意識が生じてしまうように思われるため、すでに論じた予持(ないし把持)が無限に広がってしまう無限後退(ここでは「延長の無限後退」と呼ぶ)と同じように、時間的な距離に応じた差異化の限界を設けて、遠い過去や未来への意識を制限するという仕方では解消されない。

ところで、フッサールは「延長の無限後退」の核心を、そのつどの瞬間に「諸瞬間の顕在的無限を持つこと」と述べていた (XXXIII, 28)。すなわち、問題は直後の瞬間の意識についての予持が、その次の予持を介して次の瞬間の意識へ、さらに次の予持

10. ここでフッサールは最初に把持を例にとって図の説明をするが、直後に「この考察は(…)予持の側面にも転用される」(XXXIII, 228)と言われるように、ここでは把持と予持が共通して持つ特徴が論じられている。

を介してその次の瞬間の意識へというように、異なる時点へと無限に広がってしまうことなのである（直前の瞬間についての把持についても同様）。だがそれに対して、「経路の無限後退」とは、異なる時点ではなく同一の時点に向かう経路の増殖である——予持と予持の把持の予持は同じ直後の瞬間に向かっている。したがって二つの無限の間には、一つの同じ時点の意識へ向かうか、異なる複数の時点の意識へ向かうかという差異がある。

おそらくフッサールにとって、ある一つの時点（ないし対象）についての無限の作用が生じることはあまり問題にならない。たとえば、走る車を見るとき、その運動を知覚するためには無数の把持と予持を統合して走る車を捉える必要がある。つまり、ある対象の知覚は無限の時間的な現出の総合として成立しうるのである。それゆえ、予持や把持という作用がある対象について無限の経路を含んでいるとしても、対象が同一である限りは大きな問題にはならないだろう。

しかしながら、予持の充実を『論研』のモデルで捉えてしまうと重大な問題が生じるように思われる。第3節で確認したように、『論研』において充実は第三の作用による二つの作用の融合と解釈されていた。それゆえ、『ベルナウ草稿』における予持の充実をこのモデルで捉えようと、予持、予持の把持の予持、等々といった同一の意識へ向かう無限の経路のそれぞれについて無限の認識作用が要請されることになる。

だがその場合、それぞれの認識作用もまた予持されており、無限の認識作用についての無限の予持が想定されてしまう。すなわち、予持の充実、予持の把持の予持の充実といった異なる事態が対応する無限の認識作用を要請し、直後の瞬間において無限の予持が意識されてしまうのである。しかし、それは延長の無限後退において問題にされたように、意識がある瞬間において無限の対象を意識するという背理に陥ることになる。したがって、把持と予持の相互内属という構造を保持する限り、フッサールは予持の充実を『論研』と同じモデルで考えることはできないのである。

6 結論

本論の目標は、『論研』と『ベルナウ草稿』における充実の差異がいかにして生じたのかを明らかにすることであった。前者では充実が異なる二つの作用を外部から統一することと捉えられていたのに対し、後者では充実が一つの作用において生じる一連のプロセスであるとみなされていた。そこで本論では、『ベルナウ草稿』で新

たに論じられた「顕在的無限の後退」に着目し、『論研』の充実モデルを『ベルナウ草稿』の議論に適用するとこの無限が避けられなくなる可能性を示した。

しかしながら、『ベルナウ草稿』で取り上げられたのがもっぱら単純な知覚の場合だけであったことを考えれば、より高次の知覚や学問的な判断においては『論研』の充実モデルがなお有効である可能性もある。それゆえ、以上の議論だけでフッサールの充実モデルが全面的に刷新されたと結論づけることは性急であるが、単純な知覚の時間的構造を考える場合には、『ベルナウ草稿』において根本的な立場の修正があったとみなすことができるだろう。

謝辞 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114 の支援を受けたものである。

文献表

- Bernet, R. (2010), “Husserl’s New Phenomenology of Time Consciousness in the Bernau Manuscripts”, in Dieter Lohmar & Ichiro Yamaguchi (eds.), *On Time - New Contributions to the Husserlian Phenomenology of Time*, Springer, pp. 1-19.
- DeRoo, N. (2010), “A Positive Account of Protention and its Implications for Internal Time-Consciousness”, in Pol Vandeveld & Sebastian Luft (eds.), *Epistemology, Archaeology, Ethics: Current Investigations of Husserl’s Corpus*, Continuum, pp.102-119.
- Husserl, E. (1966), *Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*, ed. Boehm Rudolf, Nijhoff, Den Haag. [Hua X]
- (1966), *Analysen zur passiven Synthesis: Aus Vorlesungs- und Forschungsmanuskripten 1918-1926*, Nijhoff, Den Haag. [Hua XI]
- (1984), *Logische Untersuchungen. Zweiter Band-I. Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Nijhoff, Den Haag. [Hua XIX/1]
- (1984), *Logische Untersuchungen. Zweiter Band-II. Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Nijhoff, Den Haag. [Hua XIX/2]
- (2001), *Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewusstsein: (1917/18)*, Kluwer, Dordrecht. [Hua XXXIII]
- Kortooms, T. (2002), *Phenomenology of Time: Edmund Husserl’s Analysis of Time-Consciousness*, Springer Dordrecht.

村田憲郎 (2017)、「『時間意識についてのベルナウ草稿(1917/28)』を読む」、『フッサール研究』第 14 号、201—217 頁。